

と、発句はつくをよんだのをはじめとして、三十歳さんじゅうさいぐらいまでの間には、いろいろな連歌れんがの集りに出席しています。発句は連歌の最初の句で、その会の中ですぐれた人がよむことになっていました。

京都における連歌師としての兼載けんさいの地位ちいもだんだんと高まつてきました。武士や貴族、神社やお寺など、京都を中心としたさまざまな連歌の席によばれるようになりました。連歌だけではなく短歌にもすぐれた作品が残されています。

春はるくればかへりてみせよ言ことのはに

ちらで残のこらんみよしのの花はな

文明十五年ぶんめい（一四八三年）、兼載三十二歳さんじゅうにさいの早春そうしゅん、京都で有名になつた兼載は北陸ほくりくから関東かんとをはじめとする各地の旅に出かけました。

そのころの連歌師にとつて、旅たびは重要な仕事のひとつでした。先輩せんぱいの宗祇そうぎが旅に生き旅まなに学んだように、兼載も、さらに兼載の後輩こうはいの芭蕉ばしやうも、旅の中です